

シリーズ

# 新・農業人

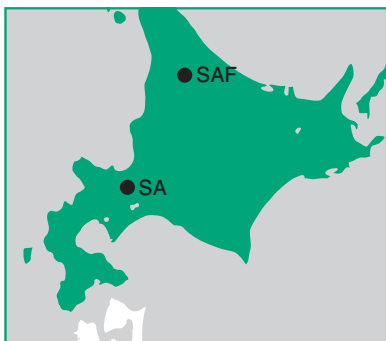
一度は諦めた酪農家の夢実現  
農協職員の経験生かして邁進

札幌エージェントファーム株式会社  
代表取締役社長

**森 恭平** さん



取材班に興味津々の牛たち(左) 外国人研修生に笑顔で指導する森さん(右)



札幌エージェント株式会社 (SA)

所在地 ● 北海道札幌市  
 設立年 ● 2017年  
 経営内容 ● 酪農ヘルパー事業  
 従業員数 ● 291人(うち特定技能外国人約260人)

札幌エージェントファーム株式会社 (SAF)

所在地 ● 北海道中川郡美深町  
 設立年 ● 2021年  
 経営内容 ● 酪農業  
 牧場規模 ● 総飼養頭数90頭(うち搾乳頭数65頭)

人材派遣会社が牧場を設立

北海道の北部に位置する美深町。カボチャやもち米などの農産物生産が盛んなこの町で、90頭の乳牛を飼養しているのが札幌エージェントファーム株式会社(SAF)だ。特定技能外国人派遣と酪農ヘルパー事業を手掛ける人材派遣会社・札幌エージェント株式会社(SA)が100%出資し、2021年に設立した牧場で、生乳生産の傍ら、派遣する外国人の研修機能も担っている。

「時代は移り変わり、技術は進歩する。意固地にならず、周囲の指導や意見をきちんと取り入れていく姿勢が重要」。SAF社長の森恭平さん(37歳)はそう力を込める。美深町出身の森さんは元々、地元以北はるか農協に勤めており、同牧場の立ち上げにも職員として携わった。今は、農協職員から酪農家に転身しただけでなく、外国人への指導も任される重責を背負うが、実直な性格どおり、丁寧な飼養管理と高品質な生乳生産、人材育成に邁進している。

SAFの施設は、後継者不在で離農した跡地のつなぎ牛舎を借りて使用している。設立当時は、コロ

ナ禍で酪農を取り巻く情勢も厳しかったため、基本的には既存施設をそのまま活用し、初期投資を必要最低限に抑えた。

牧場では、森さんのほか、SA社員の特定技能外国人1〜3人が常時働いている。スキルアップを図る研修牧場のため、外国人の在籍期間はおおむね1週間〜3カ月程度で、長期間在籍するケースは少ない。

自分以外の牧場メンバーが流動的に変化することについて、森さんは「牧場としての目標やルールをしっかりと定め、伝えていくことが重要と捉えている」と話す。牧場で働くことが初めての外国人も多いため、一つひとつの作業を実演して説明するなど丁寧な対応を心掛けるが、「日本語の基礎がある人が多く、しっかりと教えるときちんとついてきてくれる優秀な人材ばかり。国籍による作業能力の違いもまったく感じない」という。

採用から派遣まで一貫

SAFで働く外国人は、SAからの派遣社員の位置付けで、その多くはSAがインドネシアに設立した支社兼教育機関の「FUKUTOMI JAPANESE SCHOOL」



FUKUTOMI JAPANESE SCHOOLには毎年多くのインドネシア人が集まる(上) 力強い握手を交わす。左からSAの土居さん、SAFの森さん(下)

つけた人材を派遣できる点を強みにしているSA。社長の土居さんは酪農分野への人材派遣サービスを展開するうえで、「会社設立当初から自分たちで牧場を所有することは構想していた。美深町では、牛舎を借用するといったフレキシブルな就農形態を認めてもらうことができて幸運だった」と話す。

### SAとの出会い

そんなSAと森さんとの出会いは、農協職員時代にさかのぼる。離農した牧場の牛舎を借り、酪農経営に乗り出したいという企業があると聞き、牛の購入などさまざまな面でサポートしたのが最初の縁だ。

地元・美深町の農場や牧場を見て育った森さんにとって、農業や酪農は小さなころからの憧れの職業。北海道農業協同組合学校卒業後に就職した農協では、営農販売課や畜産課などを経験し、牛の売買なども担当していたが、働きながらも自分の牧場を持ちたいという思いは捨てきれなかったという。実際に20代のころ、就農への道を探ったこともあったが、単身では牧場経営は難しいと考え、その思いは一度胸の奥にしまった。

そんな森さんの前に現れたSAFは、特定技能外国人を雇用する研修牧場という新たな営農スタイル。1人で牧場を運営し、外国人を雇用するかたちだと聞き、「これなら自分でもできるかもしれない」といった思いが芽生えた。

その後、森さんがSAFに強く惹かれていたと感じた土居さんが声をかけ、2022年にSAFに入社。入社を決めるまでには葛藤があり、周囲から反対する声もなかったわけではないが、「自分の人生だ」と熱い思いが揺らぐことはなかった。森さんは当時について「農協職員として酪農にかかわるなか、自分でもやってみたいという気持ちはずっと残っていた。SAFには長年の夢をかなえさせてもらった」と振り返る。

そうして16年間の農協職員としてのキャリアを糧に、新たな道へ踏み出すことになったわけだが、地元農協の組合員数が年々減少するなか、「生乳出荷農家」というこれまでとは異なる関係性で農協に貢献することにもなると感じている。

### 周囲と連携、飼養管理向上

夢を実現し、張り切っていた森さんだが「見るとやるとでは大違

を卒業した特定技能外国人だ。特定技能は、日本で3年間の技能実習を修了した人か、日本語能力や技能試験に合格した人に与えられる資格。SAで派遣する外国人は、そのいずれかの方法で資格を取得しているが、インドネシア支社では、4〜5カ月間、日本語のほか酪農の基本的な仕事内容や専門用語を学ぶ。その後、来日し、北海道各地の牧場で就業するかたちを取っている。

SAは、人材の採用から研修、派遣までを一貫して手掛けているうえ、自社で研修学校や牧場も運営

する。こうしたスタイルは全国でも例を見ない。一貫した雇用形態にすることは、派遣先の牧場にとっては優秀な人材を確保できるメリットとなり、実際にSAの特定技能外国人を受け入れた牧場からは「日本語能力がすでに身に付いているため、仕事がスムーズ」など評判も上々だ。一方、日本で働きたい外国人にとっても、就労前に日本語や酪農について学ぶことができるうえ、日本での就労先が確保されている安心感も大きい。

専門的な知識や技能が必要となる酪農において、基礎知識を身に



飼料設計にこだわる森さん(上) 研修生とのコミュニケーションも大事にする(中) 研修生は重機を軽々と乗りこなす(下)

い」だった。就農初年度は、乳房炎などの疾病を目的の当たりにし、その要因もわからずに動揺した。

外部の有識者や関係機関から指導を受ける機会をつくり、乳質検査も積極的に実施することで牧場や生乳、乳牛の状態を逐一確認。外部からの指導を謙虚に受け入れ、飼養管理に反映させ続けたことで、乳房炎の発生率は年間10〜20%だったものが2、3%程度にまで抑えられるようになった。

そんな森さんが次にめざすのは、高泌乳牛群の飼養。SAFは自給飼料を生産する草地を持たないため、飼料は近隣のTMRセンター

などから購入して与えている。そうした牧場で収益を安定させるためには、1頭当たりの乳量向上がカギになると考えた。そのため、飼料設計にはこだわりをもち、農協

時代に培った知識や信頼できる関係者からの助言を基に、乳量を重視したメニュー設計にしている。加えて、飼料を無駄にしないための給餌量の見極めも欠かさない。それぞれの乳牛に合わせて給餌するため、配合飼料は手やりで追加する「トップドレス」方式を採用。

飼料設計や給餌方法を変化させることで、乳量や乳質などについても目に見えるかたちで向上しているという。

このほかに森さんが心掛けているのが1頭1頭の個体管理だ。それぞれの個体が今、どのような状況にあるか、牧場メンバー内での情報共有も怠らない。そうした細やかな個体管理により、牧場設立時期と比較して乳量が増加する一方、疾病数は減少。高品質な生乳生産が実現している。

森さんは乳牛の飼養管理について「自分の思いが、よくも悪くも数字や乳牛の状態に反映される。どこまでも目標は高く設定でき、めざす場所があるのが酪農の魅力。昔からの夢だった酪農はやっぱり

面白い。これからもずっと面白いはず」と笑顔を見せる。

## 質の高い外国人材育成へ

酪農界は現在、後継者不在や高齢化などを背景とした人材不足が慢性的な課題となっており、外国人労働力へのニーズも高まっている。そうしたなか、自社で外国人材を雇用し、牧場へ派遣するSAFやSAFの取り組みには各方面から関心が集まっている。

SAFでも、外国人材の作業能力の均一化とその水準を向上させることに力を入れているが、森さんは酪農界における研修牧場の存在について「ますます重要性が高まっていくのではないかと強調する。

今後の牧場経営に関しても「ここで研修した人はレベルが高いと言ってもらえるようにしたい。それが、自分の指導が間違っていないことが証明とSAの価値向上にもつながる。SAFも立ち上げたばかりであり、まだまだ勉強することが多い。従業員と共に自分も成長し、可能性を広げていきたい」と前を向いている。

(株)酪農乳業速報 伊藤 佳乃子／文

藤井 大介／撮影